

源氏物語講義

夕顔





夕顔

此卷ニ於て夕白の上
といふ女ハ帚木の妻
とて、此中扱はるる
この妻をよみうら
たる女のことハ帚
木の妻をよみうら
介此妻、次の妻をよ
書婦といふことハこ
れもとよりさる名の
女ハあはざるを、仮
目よさしと云へば、
段落

源氏物語講義

夕顔の巻 凡二大段十小段四十二節

此卷ハ源氏十七歳。中將とす。一夏の夏より。十
月まで。のこし。巻の名ハ。赤と詞を以てする。け
と。詞ハ。白くさけるを。夕白と申す。傳
とあり。まゝハ夕白の方の女房の妻ハ。あてま
そ。水のとを。白雲の光り。そ。たる夕白の志
又。源の妻。よ。り。て。を。それ。あ。と。め。た。そ。の
れ。ハ。ほ。か。で。い。つ。る。夕白とあるを。取。置。る。ん。
さて。此卷ハ。結尾。よ。り。て。書。婦。と。新。端。夜。と。夕白
と。併。合。せ。て。あ。つ。つ。し。孩。び。た。妻。を。帚木の妻とひと
と。言。ふ。こと。ハ。先。達。の。説。の。め。く。る。れ。ど。六。條。さ。つ。り。の
は。志。の。び。あ。ま。さ。の。比。と。あ。き。出。し。たる。冒。段。の。さ。ま。ハ。
中。に。夕白の妻とを。さ。ゆ。る。され。バ。夕白の。め。く。る。妻
の。さ。ま。で。一。大。段。と。し。て。ま。を。ま。し。一。大。段。と。し。て。
さ。ハ。葵。神。の。妻。ハ。伏。線。と。し。て。尾。ハ。玉。髻。の。妻。の。事。と
を。叙。し。たる。ハ。玉。髻。の。妻。ハ。伏。線。と。し。て。又。惟。光。と。右。近
の。履。歷。を。何。と。さ。る。物。語。の。う。ち。よ。合。め。て。出。し。
ま。ハ。皆。後。の。巻。よ。見。ら。る。人。を。水。を。さ。り。評

ゆふあは

一



さあといふ。同才
四節がきまるとひけり
人よめくれまるとひけり
才二大段の二小段才一
節ひまるとひの中より
おほまるとひとくさ
くまるとひれめくは同
才三節ひれめくおほれ
トとまるとひけりて同
才五節まるとひのふ
おほまるとひとくさ
とひて同才六節ひ
つことまるとひまるとひ
ふちのふまるとひ
まるとひおほまるとひ
みちまるとひひけれま
ひけるまるとひひまるとひ
ひまるとひ二大の二小段
の才一節惟光こち
もまるとひまるとひ同

あそりておぼさる。一一小段の才一節之。夕歌の家
てみるさまと。門ハさしけられはこれけふの
要ふなり。源大貳の乳母の家を訪ひのふよ。門をさし
たれを。まむし御のふあひひよ。夕歌の門をさす付のふ
こ。これぞ夕歌のこもの。お来るまむしめといはるれ
るなり。〇むつやげちるおほぢあやしくは苦しき
大路之。〇ひがき。檜垣之。〇をの。きひひつきの半
幕ハ上の方のむしりげてあるゆゑ。人々の額をよりみゆる
〇まきまげ。簾のひまより透てみゆる女房の影之。〇
おほまるとひあけたるまむしめつこよ。丈夫まき人と
おほまるとひとく。是ハ中二階めきたる長屋の物よりさ
のぞけは。せまき人とおほまるとひ。〇ひあるまむしのつ
どくるまむしんとやうかそりておぼさる。是ハいとあやしく
丈夫まき人と人のふゆゑ。如何なる人なるん。と甚怪
し。このまむし。これけふの怪談をかきおほ伏案なり。
おほまるとひ。さむし。さむし。おほまるとひ。おほまるとひ
ぬら。誰とのまむしんとうちとけのひてまむし

九号三

才二節殿の内のふ
いそまるとひ十四のまむし
ハ皆眼目之きて九月
廿日の付どよをおこ
うらまて強ひてとあ
るよ。源のまむしのや
、西本性よまむしなり
さむしをまむし。たれま
むしよりまむし。おの眼目
を省けり。
服冠
是ハ本文の注のふ
よのふ。一
一才二節
いれの程なくは
の間なく狭き。〇い
けこあさして。〇い
古今集卦中ハいづこ
あさしてあさるん由

さむし。まむしのくれハ門をまむし。お
あげ。いれ程なく。ものまむし。すま
おを。表より。まむし。と。おの。まむし。を。まむし。
のうて。まむし。おほまるとひ。まむし。まむし。けむ。物よ。
いと。あま。まむし。まむし。の。まむし。まむし。まむし。まむし。
まむし。まむし。花ぞ。おのれ。ひと。り。まむし。まむし。まむし。
らけ。まむし。まむし。まむし。まむし。まむし。まむし。まむし。
を。まむし。まむし。まむし。まむし。まむし。まむし。まむし。
夕が。まむし。まむし。花の名ハ。ひと。あま。まむし。まむし。あま。
や。まむし。まむし。まむし。まむし。まむし。まむし。まむし。

源氏物語講義

ゆふまは

三

離世のへるをいひぬ
 ○別びりあれが判
 限あれをぬ○別びり
 別に引あへ伊世物語
 よよの甲よささうぬ別
 のさくぬあれも伊世
 といひる人の子れた
 めとあをを取まり
 ○別びりまて不扶
 きまてぬ○げも思
 ちげよはるも思ひぬ
 なるはと思ひ考へ
 てみれぬ○別びり
 べたらぬ通例あり
 ぬ○内まへせに尼
 の身の仕合と子供ら
 が思ふ○別びり
 「俗らちがあれぬ
 といふとぬ○別びり
 けたれ」うちちる状

養首
 む人あやうあるやうなるかゝりぬと志す
 くおのひむつあるまぢたをまこたすく人おのひむつ
 ひとくちりて後いこのぎりあれが判夕よもえと
 まるぬのすくま^{尼を}とあひまするづるといなるれど
 なる久しうぬめんせぬ時^{保の}にほそくおぼゆ
 るをさうぬ別いなるもあれとちんたど。こまや
 めよあひひぬて。おのひぬくるは神のよ
 ほひぬいとおせきまてあゆりもちたるよげよ思
 つた。おるまへぬ人の内まへせどありとあま思
 ぬぬのいひみつる子供もこれうち志はたれけり

九号六

泣を塩垂といひぬ
 一ノ才四節
 伊法など云は修法の
 祈りのことと控てぬ
 て○志すくめして
 物後などいふちち
 日のくれよはるも思
 ○ありつる扇先割の
 扇をそよのふれぬ○
 めてちりしたるうり
 りに持馴したる人の
 ほとも志すれてたき物
 のうつり者の深たる
 ○あてよのあひあ
 ていおあてよへ源
 を夕白の花よたとへ
 ていふこといおあ
 てよ源氏のとぞ思ふ
 光をそへてうらも
 思ふなり○別びり

一小段の才三節。源大貳の乳母の家を初ひぬひて。
 尼をそよ家族よ弟面一のふさすを叙せり。おぬ娘よ
 尼をそよどりと思つる子供も」といひて。まよみ供ひい
 とこころと思ひて」とあるハ。例の照意のそを有り
 修法など又くむべきことおきての娘の世
 て。知るとそ。惟光よ志すくめして。ありつる扇は鏡
 だれバ。めてなすうしたるうつり香いと志すあう
 なるあうそをいひいひいひいひいひいひいひいひい
 ひあてよ^{夕白の花}それをとぞみる自家乃光そへたる
 夕がほの花。そこちのとなくあきまはらうとま
 もあてよのよ^{由所}ゆるつききたれをいと思ひのほのよを
 ひうおぼのよふあれうつよ^{源氏}西なる家よふな

源氏物語講義

ゆふぢのほ

六

そのとるくはとて
 もちくかきまじりし
 したるん○
 るまきし好色の方
 ようのまきしと惟
 光が思ふん○
 げは不都をげよ○
 引くくくをまじ折
 帯つまきまきぬむと
 思ふのこゝ○
 らん案内知り居え
 者よ問へと○
 めいのまけるる人の
 拾遺は揚名かひ只名
 のこをあげてまことの
 かのめくふ勢とつあ
 ささるゝもなきて権
 名のめく福をゆゑと
 もなまきまきまき
 されバ田舎よまの

よ人のまむぞとひきたりやとのめへの傍のうる
 さきほらとら思ふぞさはやさぞこめおと目こよえ
 づねどをうさのと思ひひくまへあつあひ侍ふ
 ねどよとなりれとらえま侍らねなど。うたな
 げよまきぬれづよくくくを思ひこれなされど
 このあまぎのうづぬぎまゆあつてまゆあな
 ほはあつりれまねんものをめしてとんとの
 むんづいりやあめい乃まけなる人の家よるん侍
 とひきくやうめい乃まけなる人の家よるん侍
 りけるをともいぬあまのまゆりて女な人こらとく
妻の兄弟
下男
田舎
夕白の乳母の女揚名か

九号七

りてとら任ふるは
 いたるるるるるる
 たるるるるるる
 のまきし揚名かひ只名
 のこをあげてまことの
 かのめくふ勢とつあ
 ささるゝもなきて権
 名のめく福をゆゑと
 もなまきまきまき
 されバ田舎よまの

の妻の兄弟
 車このまきぬれづよくくくを思ひこれなされど
 とひきくやうめい乃まけなる人の家よるん侍
 りけるをともいぬあまのまゆりて女な人こらとく
 りがほよ物なれてしるるれと
 きいよやあんとおむせとて
 ろのよくあまきぬれづよくくくを思ひこれなされど
 よおのうらぬあなありり
 ふうあらぬまはまよあまきぬれづよくくくを思ひこれなされど
 けりてしそそれうともえんたをうねよほらぐ
 うるをれの夕の月あまのまゆりて女な人こらとく
重
好むの方
壘紙
行か
先刻の

源氏物語講義

ゆふがは

七

先づな程の心○ふ
 ともて心を見果
 て後とりふと○
 御心を程思め
 りあひごま○
 うちのちごま
 船路のゆゑなりと
 云て○
 ろもやつれたは少
 しを悪く容顔の瘦
 せ○
 つり太とや
 ぶ○
 ちどぬひたれど容
 顔ちど年たけてあ
 れど○
 折のとき伊よの書
 ありこくハ伊よの

区が御おま○
 ともあ○
 を所○
 是程よ伊よのまけのぼりぬ中○
 ねりある○
 きたる旅ま○
 どんからや○
 きてま○
 てちどぞありる○
 ふうりつと○

九号十一

のこふま○
 ぼせ○
 く○
 飛○
 ウラシヤ○
 めた○
 心○
 あ○
 片羽とん片羽ハ不具
 のと○
 木の枯の女の段よ
 が○
 よ○
 女○
 やま○
 の○
 の○

くまがゆ○
 ちり。物ま○
 こ○
 ぞちのめ○
 け○
 めをば○
 ぐりぬ○
 ち○
 と小君を○

源氏物語講義

ゆゑのほ

事をか知しとあるは片
羽さるべありたりと
思ひよつて伊ふ介
をいとほしき思ひ
ふれと○引てよげ
るまは源と名とを際
の似合えぬと○今
さしよるまは源と
ごしを原をつれさく
めてるしたるものを
今更し後んがえん
る一うらむと○お
げのきつらひよつて
しるとの我にさげは
先ん信実よありさ
むるまは源つひの
の似合○ぬまき
に嫌すく残念な
るもの○ぬら
よとあるとも夫の志

とよてだよ。あららあよえもまきれは
まげ。まてよげなるまは源ひて。まは源よみ
るまは源と名とを際
の似合えぬと○今
さしよるまは源と
ごしを原をつれさく
めてるしたるものを
今更し後んがえん
る一うらむと○お
げのきつらひよつて
しるとの我にさげは
先ん信実よありさ
むるまは源つひの
の似合○ぬまき
に嫌すく残念な
るもの○ぬら
よとあるとも夫の志

九号十二

つて定まるとも○
かまはるおまき
○とくつてさめん
とよまは源つひの
の似合○ぬまき
に嫌すく残念な
るもの○ぬら
よとあるとも夫の志

二小の才三節

秋まらるぬいとし
物思ひのそふ時○
人やりするぬ人よ
ひまは源つひの
の似合○ぬまき
に嫌すく残念な
るもの○ぬら
よとあるとも夫の志

えぬつよくなるた。あまは源つひの
えさ海やまをたのむと。このくまは源つひの
ころかうごまきぞありたる。二小段の才二節之。
思出の折らう。伊ふ介。秋よもなりぬ人やりする
上京せしと叙せる。秋よもなりぬ人やりする
むらひは源つひの。あまは源つひの。あまは源つひの
よ。あまは源つひの。あまは源つひの。あまは源つひの
入。六条のつりよ。あまは源つひの。あまは源つひの
を。あまは源つひの。あまは源つひの。あまは源つひの
い。あまは源つひの。あまは源つひの。あまは源つひの
の。あまは源つひの。あまは源つひの。あまは源つひの

源氏物語講義

ゆゑがは

ちりや、何んちりやと
 探るまよえ〇あつら
 まのこち源の陽りな
 ふ曉の道をへんて候
 ぢせせむとん〇そ
 こそあともくまど
 けつじとんもく
 感んん〇出まがよ
 ちりや、何んちりやと
 探るまよえ〇あつら
 まのこち源の陽りな
 ふ曉の道をへんて候
 ぢせせむとん〇そ
 こそあともくまど
 けつじとんもく
 感んん〇出まがよ

ぬらちのししてはつひよ人をそへあつらまのこ
 ちやうあをせはありのせんとしづぬれどそ
 こはあともくまどけつじとんもく
 えあるまどく。夕白が源の
 ちりや、何んちりやと探るまよえ〇あつら
 まのこち源の陽りなふ曉の道をへんて候
 ぢせせむとん〇そこそあともくまど
 けつじとんもく感んん〇出まがよ

のへんちりや、何んちりやと探るまよえ〇あつら
 まのこち源の陽りなふ曉の道をへんて候
 ぢせせむとん〇そこそあともくまど
 けつじとんもく感んん〇出まがよ

ちりや、何んちりやと探るまよえ〇あつら
 まのこち源の陽りなふ曉の道をへんて候
 ぢせせむとん〇そこそあともくまど
 けつじとんもく感んん〇出まがよ

のひびききこもるは
柄碓もすわれのり
はゆい何の響とも知
るぬとん〇志ろた
の衣うつらと白襟の
衣〇志のびあたま
と表れよたつる
ま〇〇〇〇〇〇
源と夕鳥と一ふよ
〇〇〇〇〇〇〇〇〇
狭き〇〇〇〇〇〇〇
れ作中ハ風致ある
のたれが志也れた
と云〇〇〇〇〇〇
きりくはだよ源
の常は位のみぬハ
く壁の中よ鳴く
蟀でも聞遠よ夢の
るをばあハ狭きあ
市耳よきあてたる

のまびらとあやうめが
こまひふとてい
の衣うつまぬ姑の
すこいされを雁ぶ
がぬきとおほ端あ
り戸をひきあけ
ふ種なき庭よシヤレ
かふるふおぬヤカミク
づりあヤカミクく
ほよするらひヤハリ

十号七

〇〇〇〇〇〇〇〇〇
云源志の切なる
申よ万の堪忍志
のあ

四小段二節

志ろまあせせよ
き裕よ葉の唇色の表
着を著たる〇〇〇
〇〇〇〇〇〇〇〇〇
夕鳥のさまゆるよ
あふけるれはるん
まの〇〇〇〇〇〇
〇〇〇〇〇〇〇〇〇
くろやま〇〇〇〇
安よ一泊せん〇〇
いと〇〇〇〇〇〇〇
甚キウクツナリと
〇〇〇〇〇〇〇〇〇

やうよなまきみ
るもほらうぞ
つみゆ夕鳥の容体
志ろまあせせ
るやのするぬ
ちて。そことや
どほそやあ
けをひあな
ゆこころをみ
のひさるが

源氏物語講義

ゆふあは

二十二

どうしてせむきうな
らん○この世のこ
らぬまじ未末まを
繋るこつらひのま
りの弥靴を引たる
は照る人○おぼめ
しなまじつらひ女房
達のさまゝ女房の
よおぼつらひ思ふ
りの主のク白のふ
めを思ひてたのみを
かけてよろこぶま

四小ノ身三節

おけがたゆまじよ
身一節は唯ちあふ
りよけるるまじと
あるまじ○みこ
けさうじみこけハ吉
野金峯山之その金峰
山へまゐるとして、十日

の精進をおとるめ
○だちみのけまひ云
云老翁の起座は堪
へ難き状○おぼ
うらんのおぼろし
云當来ハ未末之尊
師ハ弥勒のまじ○こ
の世のまじハ行者
も来世を頼めば未
来のまじハ必ある
づーさればまじも未
来のまじを繋らま
しとのまじ○おぼ
くかのまじ優婆塞ハ
俗者から仏弟子よ
入一入ハ行者をいふ
之、まじハ行者の行ふ道
をまじまじ未末の
世も夫婦の繋りを
まじひまじまじ○長

源氏物語講義

ゆふみは

るればいざなむ女房ちのまじよこらやま
てあまさんうそそのまじいこらまじけりよ
強くをいひでうまあまさんといとおぼ
いひてみまじこまおまじいぬちまじま
でいあめあまうちまじいぬちまじま
やうあまうてまおれたる人とも見えぬ人のお
めまじいぬちまじいぬちまじいぬちまじ
路身をめまじいひして馬車ひまじいれまじいぬちまじ
ある人まじいぬちまじいぬちまじいぬちまじ
おぼあまうちまじいぬちまじいぬちまじ
の身二

十号八

第ハ夕白の上の肉布
上并ハ形容叙せむ。あけがまじいぬちまじいぬちまじ
とりれおまじいぬちまじいぬちまじいぬちまじ
らん。まじいぬちまじいぬちまじいぬちまじ
ぬのけまじいぬちまじいぬちまじいぬちまじ
あまじいぬちまじいぬちまじいぬちまじ
あまじいぬちまじいぬちまじいぬちまじ
なるまじいぬちまじいぬちまじいぬちまじ
わ。とあまじいぬちまじいぬちまじいぬちまじ
まじいぬちまじいぬちまじいぬちまじ
あまじいぬちまじいぬちまじいぬちまじ
あまじいぬちまじいぬちまじいぬちまじ

つるよ同 強勢へと
あり物さべし

六小、弟二節

風や、あがり〜云
上上の五小段弟四節よ
風さ〜打ふきたる
よとみるそ尾〜○松の
ひびき夜のふけまづ
まうてもの〜ひびき
ま〜ゆゆるま〜○
か〜あよなききた
からびたる声よ鳴ハ
ものまごまをい〜
○ひさ〜きまぬ〜
さ〜ま〜い〜ま〜さ
ま〜ふ〜ひ〜ぬ〜あ
と〜ん〜あ〜ま〜
ひれひ〜り〜さ〜ま
人よ〜源一人勅指な
くて、あ〜ん〜ら〜あ〜ひ

るぶらも當惑〜
ふさま〜○火のほの
あよま〜ま〜火の
ちり〜と晴〜るり
あ〜〜〜を云
〜○〜屏
風の上の方の〜か
〜火のあけ〜るり
て晴ま〜をい〜
○れの、あ〜お〜ま
〜見ハ物の足さのや
うよめり〜とまをな
どのまゆ〜
○千夜をさ〜
人を待るの久〜ま
ま〜をい〜
〜急ゆ〜
〜変化の筋されバ
〜て物ま〜
をの〜叙〜つれど

ひのふ よきまの 状 さき 吹たふを。浦して松のひびき本あ〜の〜
シウカハッタ 枯声 鳴ある名ものか〜急よなききたるも。あ〜
い〜れよやとおゆ。ちあひめ〜
いある〜け〜
な〜と〜あ〜
や〜ま〜や〜ん〜あ〜れ〜。右近ハものもさえん。
まよつとをひきりて。さ〜ま〜ま〜ぬ〜。ま〜
これ〜い〜あ〜る〜ん〜。とら〜ま〜
れひ〜り〜さ〜の〜ま〜人よて。お〜
源 カシロキ 右近を

さまや。火のほのま〜ま〜ま〜。母屋 やのま いた
てる屏風乃の〜。あ〜
区のふよ。あ〜お〜ひ〜
川〜
あ〜さんとお〜ま〜あ〜
こ〜
ひさ〜ま〜い〜。ちよ アヒダ 夜をさ〜
う〜
てなよの契りよか〜る〜
あ〜
源 カシロキ 右近を

くよありて名の
了す元夜もあけん
とせよよつとて所ん
も静まり一き備えさ
て所ん静まりよつ
けて又次このこと
思ひ出のふさほいと
こまやあさる若ら
あひよよ味をひて
えさる一〇ありて
てかやうようきさ
ありてそのをひく
りてん

六小段三節

のらうして怪光云
と源の宿のひひ
しを怪光あらうして
まありたるさまい
めでたし源の恨み
のふさまをたもみ

むくいよ。かくき前後よき倒とけさきのためとなり
ぬべきとふあるあり志のぶとも世もあるとか
くれなくて肉内裡よきさーめされんことををいめて
人の思ひいんとよのらぬナマイキノ童ノくちぢさび
よぬぬべきさあり。ありてをこあほバカラキきかを
ともべきわれと。おほ源ノめぐら六小段の弟二
まどふ。のらうして怪光の物言するあり。よま
あ何あつきとけを。はんよまこあへるもの。今
夜よひまさあうまを。めよまへおこ急うつる。やよ
憎くとおもほまゆのうらめりれて夕白ののひ

〇引とりのりまは源
の状之早速よりの
いれぬぬさまた
もある一〇右近
いれのけをひま右
近怪光の来りやう
とをすてその初め怪
光の源を夕白の初へ
あよりせをひまを
思ひ出る一〇引まをの
べのひてぞ息を伸
怪光が来りしと因て
おくらろぎのあさ
〇や、ためひて
漸く猶豫して一〇引
短など見ハ変化を
えらひ且夕白のい
ま出人ためは鐘をよ
ませのあ一〇明日少
まは山とのいひハ

おんトモよのあへるまよふとものりしれぬらび右
近大夫怪光いれのけをひまきよはぶめよまのとうち
おひひ知れてた泣を君ルえへるいで。これ
ひらりさカシコガリい右近まもちめりけるよ。こ
の人よいまをのべのひてぞ。あさ怪光まよもおほさ
れぬ。とた暫時のりいといさかとめぬるま泣
ぬふや、ためひて源相あや餘まきとれあ
るを。あさシングワイといあまあまうてる人ある。あ
あるとまのニハカまよふ。ま経誦經なまをこをいさるれ
とそその誦經ノませまをんぐまん。ゆるどもたてさせ

比叡山のこゝへ
 見よて阿闍梨の叡山
 の僧さると志すれた
 り○あひて例さるる
 夕白の上よりあひて
 遠例さるるものとあつた
 よやとと○おのれも
 よくとさるるぬ性光
 も源の位のかをいそ
 夢をたててかゝり位
 志たるささやと、おの
 泣くまゝ河海よりか
 あれど引あふあぬ
 六小ノ才四節

んとてあざり物せよといひやりつるをとのぬ
 伊カニ 甚
 ふよ。唯る山々まありのぼりまけり。ま例いよあづ
 珍事
 らのなるよとよもゆるうれ。あひて例さるるべは
 ちこれのせさせのふとや侍つらん。ささるるとるな
 ありつとそなきいめふさ侍いとをさうーげよらう
 シク。さそまつる人かいとあれーくて。おのれも
 すとさるるぬ
 六小段の才三節。性光まお
 りて。勢まきまどふさ侍らう。
 さいつと年うちねび世のなるれとあるとら
 別て功者かゝる人
 志向しとぬる人こそ。あのをらあふふのれし
 ありけれいついもくもこのまどちよて。いそ

士号五

らど、おの文を省ける
 よて性光源の位のか
 をらうた。ととさる
 て、さそあふつとよ
 若きとちととめたけ
 れさし。どかやうのを
 りよ、八年うちねびた
 る人まこととつとあさ
 えぬけつとれは文さ
 遠つり○山寺とと山
 寺ハ死人をあつあふ
 多けれはめだつとと
 性光の志するる案
 性光の志するる案
 一えのつ一女房性
 光の昔源もえ知の人
 一女房の尼はありて
 住める山寺とと○ち
 此の世のめのと云

んのさるなけれど。この院りさどよまきあせむ
 とら。いとびんなさるる。この人ひとりとこそ。
 源とハ
 むつま。うもあしめ。おのづかう物いひから
 つま。く急んぞくもさあま。さきたらん。ま例
 院をいぞおさ。さぬといふさそ。是より人さ
 なるなるあを。いあそああ。んとあふ。げよさを
 侍らん。あのみさるさ。とと女房やどのある。い
 よとと。さ。ま。ま。い。侍らんよ。とさるる志げ
 答
 とおむるさ。と人おほく侍らんよ。おのづかう
 編
 まこと侍らんを山あ。を枝。やうのとおの

源氏物語講義

ゆふあは

三十五

りふゆ邪人○
 可く又主ゆりま
 て○いさぶれ行觸
 ぬけあひひおひひお
 けさき穢ん○いこ
 そたづー^一甚痛
 心よゆるとのまを
 本居翁がたみの説
 又怠々の字音の説な
 とあるハ何事も非ん
 師説たづ^一ハイタイ
 の川を略きたると
 いへり^一説よろ^一○
 翁人の辨中翁ハ疑ひ
 のゆき共ままりの
 翁人の弁は眞実ら
 一^一勅答^一のつん

くゆとのまをせのひて^{帝のヤ}あ^一ゆる
 きと^一えのひて^一ちあ^一つり^一い^一あ^一つり^一き
 ぶれよか^一らせのふぞや^一の^一せのふこと
 こを^一ま^一も^一おのひ^一ら^一ひ^一と^一り^一あ^一む^一ぬ
 うちつ^一ぶ^一れ^一の^一ひ^一て^一あ^一く^一こ^一あ^一の^一よ^一そ^一あ^一う^一で^一た^一だ
 おぼえ^一ぬ^一げ^一づ^一ひ^一よ^一あ^一れた^一ま^一よ^一を^一そ^一う^一し^一の^一え
 い^一と^一そ^一あ^一ひ^一づ^一ー^一く^一ゆ^一れ^一と^一つ^一進^一する^一の^一ゆ^一と^一ん
 の^一うち^一よ^一は^一い^一ふ^一あ^一ひ^一る^一く^一あ^一お^一き^一と^一を^一お^一ゆ^一を
 よ^一ほ^一く^一ち^一ら^一な^一や^一ま^一け^一れ^一を^一く^一よ^一め^一も^一あ^一を
 せ^一の^一ひ^一づ^一翁人の辨をゆ^一よ^一せ^一ま^一め^一や^一あ^一

十二号九

○か^一る^一を^一ま^一く^一
 か^一る^一あり^一て^一云
 け^一れ^一も^一あ^一ま^一き^一ぶ
 れ^一の^一ま^一き^一
 一^一小^一ノ^一オ^一三^一第^一
 か^一る^一け^一あ^一ひ^一ろ^一
 人^一げ^一あ^一ひ^一ろ^一は
 性^一光^一と^一密^一の^一ま^一き^一を
 護^一り^一の^一ひ^一と^一て^一ホ
 ゆ^一き^一ふ^一れ^一ま^一き^一よ^一せ
 て^一人^一を^一速^一ぎ^一け^一る^一ふ
 さ^一ま^一き^一○^一今^一ハ^一と^一み
 を^一そ^一う^一や^一ひ^一も^一や^一蘇
 生^一あ^一る^一と^一ん^一ま^一き^一た
 る^一の^一ま^一き^一○^一あ^一ひ^一と^一
 ま^一き^一本^一山^一の^一危^一お^一住
 あ^一ま^一夕^一白^一の^一屍^一を^一ま^一き
 お^一あ^一ん^一も^一不^一解^一合^一る^一れ
 ば^一ま^一き^一○^一あ^一ひ^一と^一ま^一き^一
 と^一ま^一か^一く^一の^一ま^一き^一

よ^一か^一る^一を^一ま^一く^一^奏
 る^一何^一り^一て^一え^一系^一ぬ^一れ^一せ^一う^一そ^一こ^一ち^一ま^一ど^一ま^一正^一の^一ふ^一
 段^一の^一オ^一二^一第^一之^一源^一痛^一哭^一の^一二^一内^一裡^一よ^一り^一勅^一使^一あ^一り^一て^一源
 の^一安^一吾^一を^一と^一り^一せ^一る^一大^一殿^一の^一公^一あ^一ち^一訪^一ひ^一る^一状^一あり
 日^一く^一れ^一て^一性^一光^一系^一れ^一り^一か^一る^一け^一づ^一ひ^一何^一り^一と^一の
 多^一あ^一ひ^一て^一ま^一あ^一る^一人^一も^一い^一れ^一ち^一ち^一あ^一ら^一う^一ま^一あ
 づ^一れ^一ば^一人^一げ^一あ^一ひ^一ま^一き^一よ^一せ^一て^一い^一の^一ま^一き^一を^一い^一ま
 る^一と^一ま^一き^一を^一は^一や^一と^一の^一ま^一き^一ま^一ま^一よ^一袖^一を^一は^一の^一ま^一き^一よ
 お^一あ^一て^一く^一な^一ま^一き^一の^一ふ^一ら^一れ^一の^一川^一も^一な^一む^一く^一い^一ま^一ハ
 あ^一ま^一り^一よ^一ら^一そ^一ハ^一物^一の^一ま^一め^一れ^一な^一ま^一お^一く^一と^一こ^一ら^一も
 り^一ゆ^一らん^一も^一む^一ん^一さ^一ま^一あ^一る^一ん^一日^一よ^一ま^一ら^一く^一ゆ^一

源氏物語講義

ゆふあは

三十九

重きかよふ狭きこ
あぢかぢよ強て
○かゝるべき宿縁と
かくあべき宿縁と
○又うちあへ
表はおぼゆる中よ
おあへと思ひやられ
てつれなる雙やと
え○かゝるなき
中よきかやうよ
白の世は長くある
中よき人をサウシテ
マアへ○七日の仏
十三仏を七日の
よあて書て亡者の
為に供養するよ
心のうちよ夕白乃と
ハ人よかゝるよ
んのうちよと
○なまはるよ

メイワクナ
うるまきまのち候よるんあるやたこのちのり
一タブよりあやうらうらよあうてあまの
ちよみまうしもかゝるべきちぎりよこそハ物
一のひけめと思ふも表よるん又うちあへ
らうおぼゆるかうるのさまざきよてりるど
さしもはよまて表とおぼゆるひりん
係をよ夕白の身の上を語
いしうこれらまのよをかゝるべき
七の佛かゝてもあがためよのち
まらるんとのめいなるのちよてまてせ
んづうまのびせむのひとてやなまはる

十二号四

ちりやひい
二小段の才
おやたちハ夕白の父
母をいふは右
近お夕白の上の父
上を物語る○お
のほどのいふと
中お夕白をよ縁
かれとおぼせと
おぼのあまをよ
まをおぼつるよ
ひのうちよ命
まのちよ命

ろよくちさのちやと思ひのち
よるん 二小段の才三節之原痛哭の餘波の一右近を
右近詞 召て物語しるは後後して徒然乃状を
おやたちハちやうせのひとて位中おとま
んすま 三位中お夕白を
あどあまのほどのいふとてやおぼゆる
よ命さへあまをば後ハフトニタコ
のたよりよて中おまが少なるものひ
一財をそめならせのひて三年をよりん
あるまよよあひのをこそ秋乃比の右
大五段よりいとおそるまよとてまて

源氏物語講義

ゆふがは

四十九

づの四つを筑
 ばまゝめてゆく○い
 とおそろしきこと
 右大五郎の四太の
 中宿の妻は公儀殿よ
 りは女をおどしめ
 るやハ帚木よ又え
 り○おみこびて住
 あぐんで○おれよ
 りハみこびりたは俗
 よ三年暮るるどい
 方なるべし○とお
 ちるげくめり○は
 お括辞の落たるよや
 川の結ひとくつづと
 て諸説あれど是ハ
 格の結ひとてよと
 けり○おのづみ
 めのをほくみかく
 へ物よ恥らふこと

こゝよ。物おぢを^{メツタニ}をりりする志の^タ。おぢよせんあ
 さまうおぢーおぢて。よの系^{乳母ハ揚名介の妻}よはめれとのま
 りゆる^{ヒツカニ}おぢよらんをひのくれの^{ヒツカニ}か。それかい
 とくも^{ヒツカニ}きたはさくつびめひて。山里より川
 ろひるんと^{おぢ}えたる^{おぢ}。よより^{おぢ}あごり
 くる^{おぢ}よ^{おぢ}侍り^{おぢ}を^{おぢ}れ^{おぢ}。あご^{おぢ}よとて^{おぢ}あや^{おぢ}志^{おぢ}ま^{おぢ}
 の宿^{おぢ}の志^{おぢ}結^{おぢ}ひ^{おぢ}を^{おぢ}。あご^{おぢ}よとて^{おぢ}あや^{おぢ}志^{おぢ}ま^{おぢ}
 おぢーちげくめり。よの^{おぢ}ひよよ^{おぢ}ぶ^{おぢ}め^{おぢ}の^{おぢ}づ
 へ^{おぢ}け^{おぢ}ひ^{おぢ}て。人よ^{おぢ}もの^{おぢ}思^{おぢ}ふ^{おぢ}氣^{おぢ}を^{おぢ}を^{おぢ}えん
 を^{おぢ}ら^{おぢ}づ^{おぢ}あ^{おぢ}き^{おぢ}め^{おぢ}の^{おぢ}よ^{おぢ}の^{おぢ}ひ^{おぢ}て。つ^{おぢ}れ^{おぢ}る^{おぢ}く^{おぢ}の^{おぢ}こ

十二号五

○おぢての下小楯の
 祝のぬゝおぢてされ
 一のの結ひとくつづ
 づ○おぢてのきんま
 といへ^{おぢ}と^{おぢ}帚^{おぢ}木^{おぢ}よ^{おぢ}取
 中宿が^{おぢ}穂^{おぢ}子^{おぢ}の^{おぢ}ら^{おぢ}う^{おぢ}た
 げ^{おぢ}る^{おぢ}り^{おぢ}。一^{おぢ}と^{おぢ}ひ^{おぢ}た^{おぢ}る
 を^{おぢ}さ^{おぢ}ら^{おぢ}え^{おぢ}因^{おぢ}え^{おぢ}は^{おぢ}あ^{おぢ}の
 ま^{おぢ}ど^{おぢ}り^{おぢ}ハ^{おぢ}前^{おぢ}段^{おぢ}の^{おぢ}眼
 目の^{おぢ}類^{おぢ}は^{おぢ}唯^{おぢ}冷^{おぢ}以下^{おぢ}お
 ね^{おぢ}ど^{おぢ}○^{おぢ}お^{おぢ}ぢ^{おぢ}人^{おぢ}や^{おぢ}と
 や^{おぢ}う^{おぢ}の^{おぢ}女^{おぢ}子^{おぢ}あ^{おぢ}り^{おぢ}や^{おぢ}と
 問^{おぢ}の^{おぢ}お^{おぢ}ぢ^{おぢ}○^{おぢ}お^{おぢ}ぢ^{おぢ}の^{おぢ}サ
 ヤ^{おぢ}ウ^{おぢ}ヂ^{おぢ}ヤ^{おぢ}と^{おぢ}さ^{おぢ}ら^{おぢ}ん
 ○^{おぢ}お^{おぢ}ぢ^{おぢ}よ^{おぢ}え^{おぢ}せ^{おぢ}せ^{おぢ}よ^{おぢ}その
 女^{おぢ}子^{おぢ}を^{おぢ}ま^{おぢ}あ^{おぢ}よ^{おぢ}ら^{おぢ}せ^{おぢ}よ^{おぢ}ん
 ○^{おぢ}あ^{おぢ}と^{おぢ}さ^{おぢ}ら^{おぢ}う^{おぢ}ち^{おぢ}く^{おぢ}て^{おぢ}ん
 ね^{おぢ}ら^{おぢ}き^{おぢ}あ^{おぢ}と^{おぢ}を^{おぢ}討^{おぢ}り^{おぢ}な
 く^{おぢ}哀^{おぢ}し^{おぢ}と^{おぢ}思^{おぢ}ふ^{おぢ}ハ^{おぢ}鳥^{おぢ}の
 か^{おぢ}ら^{おぢ}み^{おぢ}よ^{おぢ}ん^{おぢ}○^{おぢ}り^{おぢ}か^{おぢ}ら^{おぢ}ひ

おぢて。おぢら^{おぢ}ん^{おぢ}せ^{おぢ}れ^{おぢ}な^{おぢ}り^{おぢ}娘^{おぢ}あ^{おぢ}り^{おぢ}。あ^{おぢ}と^{おぢ}あ
 け^{おぢ}ら^{おぢ}ん^{おぢ}。お^{おぢ}ぢ^{おぢ}を^{おぢ}す^{おぢ}と^{おぢ}お^{おぢ}ぢ^{おぢ}。あ^{おぢ}は^{おぢ}せ^{おぢ}て^{おぢ}。い^{おぢ}り^{おぢ}く^{おぢ}哀
 め^{おぢ}ま^{おぢ}さ^{おぢ}り^{おぢ}ぬ^{おぢ}を^{おぢ}さ^{おぢ}ら^{おぢ}ん^{おぢ}ま^{おぢ}ど^{おぢ}り^{おぢ}。た^{おぢ}ら^{おぢ}と^{おぢ}中^{おぢ}宿^{おぢ}
 の^{おぢ}れ^{おぢ}へ^{おぢ}ハ^{おぢ}さ^{おぢ}ら^{おぢ}ん^{おぢ}や^{おぢ}と^{おぢ}ひ^{おぢ}の^{おぢ}よ^{おぢ}志^{おぢ}あ^{おぢ}を^{おぢ}ら^{おぢ}ん^{おぢ}の
 者^{おぢ}ぞ^{おぢ}め^{おぢ}の^{おぢ}一^{おぢ}の^{おぢ}ん^{おぢ}。女^{おぢ}よ^{おぢ}そ^{おぢ}い^{おぢ}と^{おぢ}ら^{おぢ}う^{おぢ}さ^{おぢ}げ^{おぢ}よ^{おぢ}春
 ん^{おぢ}と^{おぢ}お^{おぢ}ぢ^{おぢ}さ^{おぢ}て^{おぢ}い^{おぢ}づ^{おぢ}。こ^{おぢ}も^{おぢ}ぞ^{おぢ}。人^{おぢ}よ^{おぢ}さ^{おぢ}ら^{おぢ}ハ^{おぢ}志^{おぢ}く^{おぢ}せ^{おぢ}で^{おぢ}。あ
 よ^{おぢ}え^{おぢ}さ^{おぢ}せ^{おぢ}よ^{おぢ}。あ^{おぢ}と^{おぢ}り^{おぢ}の^{おぢ}あ^{おぢ}く^{おぢ}い^{おぢ}と^{おぢ}ど^{おぢ}と^{おぢ}思^{おぢ}ふ^{おぢ}は^{おぢ}此^{おぢ}の^{おぢ}こ^{おぢ}ら^{おぢ}ん
 い^{おぢ}と^{おぢ}れ^{おぢ}。一^{おぢ}の^{おぢ}あ^{おぢ}く^{おぢ}ら^{おぢ}ん^{おぢ}と^{おぢ}の^{おぢ}あ^{おぢ}ふ^{おぢ}。あ^{おぢ}れ^{おぢ}中^{おぢ}宿^{おぢ}よ^{おぢ}も
 つ^{おぢ}ら^{おぢ}ぶ^{おぢ}け^{おぢ}れ^{おぢ}ど^{おぢ}い^{おぢ}よ^{おぢ}あ^{おぢ}ひ^{おぢ}ら^{おぢ}ん^{おぢ}と^{おぢ}お^{おぢ}ひ^{おぢ}ら^{おぢ}ん^{おぢ}と
 さ^{おぢ}ま^{おぢ}か^{おぢ}う^{おぢ}さ^{おぢ}あ^{おぢ}よ^{おぢ}つ^{おぢ}け^{おぢ}て^{おぢ}。い^{おぢ}り^{おぢ}く^{おぢ}哀^{おぢ}し^{おぢ}と^{おぢ}思^{おぢ}ふ^{おぢ}ハ^{おぢ}鳥^{おぢ}の
 ま^{おぢ}ん^{おぢ}よ^{おぢ}と^{おぢ}お^{おぢ}ぢ^{おぢ}あ

源氏物語講義

ゆふがほ

五十

りよけるはめのしもの
湖月よちをる母も夕
白のめれとさりし
まておきてとふち近
母よおれしと西
京の乳母も右近が母
うせし後のしるるべ
しとあり○
はひさえ孟津よ
とていし
ゆざらんちのさるしひ
てぞとぬを
はあのをとれ
たあをびた
あさきやう
とりさう
俗ヒヨットシテハ人
まづこ
めつみ

の矢のらうたがりひて。あのはあたりにさら
ぶおあ^生たてのひしを。思ひのひ知れ^{右近}ばいあで
あせよゆしんとまきん^{海シク思ん}いしゆんよとく
くなん。物をあるげよめのしひ^{夕白ん}人のしを
あのみ^{主君ん}きんよと。比る^{馴ん}ひゆけるしと
ゆゆ^{源の宿}をあるびたるこそ女いらうしけ^賢し
こく人よるびあぬいと^{キニクハヌ}づま^{ツニシヤントセヌ}おま^{シカクト}い
ひよ。女んた^{柔和}や^{ツニシヤントセヌ}ら^{ツニシヤントセヌ}のよと。とりさうしと
人よあ^{源の自らん}む^{ツニシヤントセヌ}れ^{ツニシヤントセヌ}ぬ^{ツニシヤントセヌ}ま^{ツニシヤントセヌ}ご^{ツニシヤントセヌ}。ち^{ツニシヤントセヌ}あ^{ツニシヤントセヌ}ら^{ツニシヤントセヌ}よ^{ツニシヤントセヌ}め^{ツニシヤントセヌ}のづ^{ツニシヤントセヌ}み

十三号七

云フモノ、物恥して
く○このあひのほこ
のまよこのまよと
ハ源氏の今物せらる
る方ん源のゆせらる
る時ぬまよ、夕白
いもてをるれはよく
叶ひしものをと思
ふよ残念なりしと
て右近ハるるまよ
○このおくものりて
是ハくれゆく秋の夕
べのけきき○
人のあつて人のけふ
りをまよとまよむれが
とハおえし夕白の華
の桐を今あのおまよと
思ひて眺むれむとの
まよ、小樽よ二の句け
ありとまよをといまよ

し。みん^{夫ん}人のらうたがりひて。あのはあたりにさら
ぶおあ^生たてのひしを。思ひのひ知れ^{右近}ばいあで
あせよゆしんとまきん^{海シク思ん}いしゆんよとく
くなん。物をあるげよめのしひ^{夕白ん}人のしを
あのみ^{主君ん}きんよと。比る^{馴ん}ひゆけるしと
ゆゆ^{源の宿}をあるびたるこそ女いらうしけ^賢し
こく人よるびあぬいと^{キニクハヌ}づま^{ツニシヤントセヌ}おま^{シカクト}い
ひよ。女んた^{柔和}や^{ツニシヤントセヌ}ら^{ツニシヤントセヌ}のよと。とりさうしと
人よあ^{源の自らん}む^{ツニシヤントセヌ}れ^{ツニシヤントセヌ}ぬ^{ツニシヤントセヌ}ま^{ツニシヤントセヌ}ご^{ツニシヤントセヌ}。ち^{ツニシヤントセヌ}あ^{ツニシヤントセヌ}ら^{ツニシヤントセヌ}よ^{ツニシヤントセヌ}め^{ツニシヤントセヌ}のづ^{ツニシヤントセヌ}み

源氏物語講義

ゆふがは

五十二

夕顔の巻終

夕顔の巻終

十二号十五

